



長塚圭史さま

# たまには手紙で

5通目



白石加代子より

圭史さん。  
うーん、暑いですね！ 夏ってこんなに襲いかかって来るものだったかしら……。

前回私がお話した、舌足らずな自分史に対して、真正面から受けとめ、よく噛み砕き、温かく理解して、一つの筋道をもつけて下さった。素敵なおたよりありがとう。

ところで圭史さんは、今、何処？ 風の噂では、8月中旬には、新潟のりゅうとびあ劇場で公演と聞こえてきましたか……。 あそこはいい劇場ですよ。お客様も熱いでしょう！ ほんとはその気にさせてくれます。こちらの熱さは、大歓迎ですね。私も何度も伺ってますから、よく知ってます。今は枝豆がたまらなくおいし。野菜がよくて、海の幸が豊かで、お酒が絶品！ くれぐれも、呑みすぎにご用心……。

私は今、8月30日が初日の「白石加代子の源氏物語」という舞台の稽古中です。これは6年程前から続け

長塚さんからのおたより 僕らの世代の舞台の一過性の笑いは、劇場から「思考」を取り上げてしまいました。表現に対して全身で思考し続けねばなりません。白石さんに負けてはられませんから。ところで、この猛暑、どう過ごされましたか？

き手をひきつけておいて、実は、ほんとうに言いたいことはその奥にあります。挿入される和歌にも、巧妙に隠された別の意味があり、漢詩まで引用されていますけれど、二重底三重底で、皮肉だったり、自嘲だったり、人生訓だったり……。紫式部の知識と創造力に、今頃になって、感嘆の声をあげています。

今年演じさせていたたくのは、「宇治十帖」と呼ばれている件で、光源氏の亡くなった後の、息子や孫の時代のお話です。

光源氏の周りの女君たちも、運命に翻弄されながらも、どの方もおどかで魅力的。宇治十帖に出てくる女君三人は、たよりないようであり、芯にそれぞれ強さがある。

五十四帖全部を振り返ってみると、登場なさる方の生涯が、巧みに物語られています。一生の終わり方、人生への始末のつけ方が幾通りもあって、そういうところにも、心ひかれている今日この頃の私です。

さて、「百物語」も「源氏物語」も、どちらも語り物なのですが、「演じる時、普通の芝居とどう違うのですか」とよく質問されます。どちらもお客様に身を晒して観ていただくという意味では、私にとっては同じなのですけど……。

圭史さんも、時々物語を読んでいらっしやるけれど、どんな感じですか？ 公演でお疲れでしょうけれど、またお手紙下さいね。

(しりいし・かよ) 俳優(ながつか・けいし) 劇作家

## 演じるのが恐ろしくなる

ているものです。今年は、源氏物語千年紀に当たるようで、いろんな方が、多くの場所で、催し物をしています。わたしは偶然かちあつたのですが、なんとなく張り切っています。でも源氏物語と聞いただけで、即座に敬遠する人もいますね。第一、演じる当の本人の私に、若い頃頑張った読み始めてみたけれど、まもなく挫折した経験があります。

そんな私の舞台は、エンターテインメントに再構成されています。瀬戸内寂聴さんの現代語訳を使って、とどころどころに原文が挟まっています。原作はもともと、読んで聞かせて、宮仕えの女性たちを楽しませたものらしく、それが千年の間、連綿と、現代まで伝わって来たのだと思つと、演じるのが恐ろしくさえあります。

源氏を6年間続けてみて、驚くのは底の深さです。色恋に明け暮れる生活や、豪華な住居、贅を尽くした衣裳、優雅な管弦の遊びなどで、聞